

【タイトル】

にんぎようこん

『人形婚』

【著者名】

川音夜さり

【あらすじ】

「息子がかえってきた」と嬉しそうに語る老寡婦の志麻。しかし彼女の息子は四十年も昔に事故死していた。担当々アマネジャーである私は、それを認知症による幻覚だろうと考える。しかし、自分の現状について懊悩する私は、志麻の言葉をきっかけに、彼女のおぞましい幻想に巻き込まれていくことになる。

【文字数】

4999文字 ※ルビ除く

「息子がねえ、かえってきたんですよ」

志麻しまさんは満面の笑みを浮かべている。

向い合う私はどう反応してよいか分からなかった。言葉に詰まった一拍の間に、何処かの床がみしつと軋んだ。

逡巡の末、「それは良かったです」と無難に返すと、志麻さんは嬉しそうに首肯した。落ち窪んだ眼窩に筋張った頬のせいで、笑顔に凄味があった。私が呆気にとられているのも構わずに、志麻さんは話し続けた。

息子はやんちゃで手に余るが本当は優しい子なんだとか。

足が速くて、クラスでは一番なんだとか。

客間は香烟こうせんでむせ返るほどだ。視線を横に転ずればその源である仏壇が視界に入る。

そこには、四十年前も昔に事故死した息子さんのあどけない遺影が飾られていた。香炉には十本余の線香が焚かれ、細くたなびく煙が志麻さんを束縛するように纏わりついていた。

(認知症がここまで進んでしまったのかな)

半年前に旦那さんを亡くして以来、志麻さんは心身に失調を来していた。通っていたデザイナービスも拒否している。志麻さんの孤立状態をどうやって解消するか、私はケアマネジャーとして頭を悩ませていた。

しかし、志麻さんを憂慮する一方で、これはこれで幸せなのかも知れないという思いもあった。

志麻さんは息子さんの存在を信じている。それが幻想であっても。全てを失ったと嘆きながら衰弱していくよりは、ずっと幸福なのではないだろうか。

(なんて、言っただけでもいられない。仕事を果たさない)

まずはデザイナービスの再開を提案してみよう。私は鞆から封筒を取り出すと、入れたあった写真を志麻さんの前に差し出した。

「お誕生会の写真ですよ。ずっと渡しそびれていたもので、今日お持ちしました」

志麻さんを中央に、隣には当時存命だった旦那さんが座っていて、端の方にはデザイナービスのスタッフや私も収まっていた。志麻さんは一瞬だけ写真に視線を落としたが、「そうなの」と呟いて、関心を示さなかった。さっきまでの喜色は既に消え失せていた。この様子だと、容易にはサービス再開に頷きそうもなかった。

沈黙が気まずい。腕時計を確認すると、そろそろ次の訪問先に向かわなければならなかった。もっと個々の利用者に時間を割きたいのに、なかなかそれも叶わない。今日も進

展なしのまま辞去することになりそうだ。

私が懊惱していると、志麻さんが突然面を上げた。「いいことを思いついた」と言わんばかりの上調子で言葉を投げかけてくる。

「あなた、独りなの？ ご結婚は？」

「えっと—— 独身、ですが」

「そうなの。どうして結婚できないのかしらねえ」

余計なお世話だ—— □から飛び出しかけた悪態を咄嗟に飲み下す。志麻さんに悪気はない。

「お年は？ おいくつなの？」

「三十四です」

「あら、ちょうどいい按配ね」

「ちょうどいい、とは」

「お嫁さん」

「誰のですか」

「決まってるじゃない。うちの息子のよ」

3

志麻さんが妙なことを言うものだから、その日の私の調子は狂いつ放しだった。

片付けるべき仕事が増積していたが、私は定時で帰宅した。

ベッドに身を沈めながら、意識的に見まいとしていた友人たちのSNSを順々に眺めた。いずれも結婚を機に疎遠となってしまった友人たちだ。

好きな人と結婚し、子どもを産み育てる。そんな日常の投稿で溢れたSNSは、私にとって毒そのものだった。こういうのを見ていると、「独身でかまわない。私は仕事を優先する」と決めた気持ち簡単に揺らいでしまう気がした。

そしてそれ以上に、結婚よりも優先したはずの仕事に対する情熱が、確実に薄れつつあるのを自覚していた。

対応に些細な落度があれば容赦のない痛罵を浴びせられる。担当する利用者に何かあれば休日も関係ない。本音を言えば、一介のヘルパーとして働いていた頃の方がよほど良かったし、退職すべきではないかと毎日のように自問自答していた。

しかし、結婚も諦めて、その上に仕事まで諦めたら。

私には何が残るのだろうか。

心が痛い。千切れんばかりに引つ張られたような痛みだった。その心痛を忘れようと泥

酔し、正体も前後も分からないまま私は意識を手放した。

翌朝、事業所に出社するなり欠畑かけはたさんから電話が掛かってきた。欠畑さんは志麻さんのお隣さんで、ここの奥様は志麻さんとは昔馴染みとのことだった。

「大したことではないんですが、十村とむらさんのことでちょっと気懸きがりなことがありまして。一昨日の晩、盆でもないのに門火かどびを焚いていたんですよ」

「門火、ですか。季節外れですね」

見当識けんとうしきの混乱のせいで季節が分からなくなるのは、認知症の人にとって珍しいことではない。志麻さんの中では今が盂蘭盆会うらぼんえなのかも知れなかった。

「十村さんは、こう言っちゃなんですが、少しボケてきているでしょう？　あまり火を使われて小火ぼやでも起こしたらと不安になりました」

もつともな心配だった。失火しっかは私も恐れていたことだ。

「うちの妻なら、いい話し相手になったのかも知れませんが、骨折して以来寝たきりになっちゃいましたから。かと言って、俺が志麻さんに問うたところで、まともな答えが返ってくるとは思えなかった。すみませんが、阿瀬川あせがわさんの方からそれとなく話をしていただけませんか」

私は同意して、連絡してくれた欠畑さんに感謝を伝えた。欠畑さんは「昨日知らせようとしたんですが不在だったので」と詫びながら電話を切った。

悩みの種がまた一つ増えてしまった。このような奇行が続くようなら、在宅介護を諦めて施設入所を検討しなければならぬ。それを本人に、どう納得させるか。

私は気が重くなりながらも、主任に今日の予定変更を伝えるため席を立った。

「志麻さん、社協の阿瀬川ですー」

玄関から何度も呼び掛けたのだが、応答がなかった。志麻さんは年相応に耳が遠かったから、それ自体は不可解ではない。気になったのは、いつも大音量で流れているテレビが沈黙していることだった。採光の不十分な古屋ふるやは薄暗く、しんと静まり返るばかりだった。まさか鍵もかけずに外出したのだろうか？

私は少し考えて、それも違うようだと結論付けた。普段履いている靴は土間に揃えられたままだし、外出時には必ず使用するシルバークーラーも、折り畳んで壁に立てかけられていた。やはり志麻さんは在宅のはずだ。

(まさか、中で倒れているなんてことは……)

命に係わる事態を想像して、不安が鎌首をもたげる。

そわそわしながら家の上がると、私は名前を呼びながら見て回った。志麻さんの居室、台所、居間、浴室、お手洗い、そして客間……しかし、志麻さんの姿はなかった。

(一ヶ所だけ見えていない部屋があるけれど、あそこは……)

亡くなった息子さんの、子供部屋。

包括支援センターから貰った情報によれば、部屋は当時のまま手つかずになっているとのことだった。夫妻は亡子の部屋を聖域と見做し、何人たりとも立ち入ることを許さなかつたそうだ。それはケアマネである私も例外ではない。

夭折した息子さんの縁を断ちたくないという夫妻の願いは、察するに余りある。でもそれ以上に、四十年も外界と隔絶された部屋は、恐怖の対象だった。

(部屋の外から声をかけてみるべきかな……)

迷ったけれど、結局それはやめた。親子の絆に水を差すような真似をしなくなかつた、というのはい言いに過ぎない。私は自分の臆病さを叱りながら、いつも面談をしている客間に入った。

とりあえず待ってみよう。座布団に腰を降ろす。泳いだ視線の先に仏壇があつたのは

偶々だ。

思わず息を呑む。

昨日までそこに置かれていた息子さんの遺影が、なくなっていた。

代わりに二体の人形が、その場所を占有していた。

「なんで人形が仏壇に」

私はその人形に見覚えがあつた。志麻さんの居室に置かれていた男女一对の稚児人形だ。黒い台座には昭和の年月日と、「祝御結婚」の文字が彫られていて、おそらく夫妻の結婚祝いだったのだろう。

仏壇に飾るようなものではない。それだけではなく、人形には何か違和感があつた。それを確かめるべく、私は仏壇にいざり寄って、人形に顔を近づけた。

私の肌は粟立つた。

「……ッ? どうして……顔に、写真が……」

二体の人形には、それぞれの顔を隠すように、切り抜いた顔写真が貼り付けられていた。顔写真の人相も、見間違えようがない。男児には息子さんの顔写真。そして女兒には、私の顔が貼られていた。禍々しい光景だった。

(き、昨日渡した写真)

あれから切り抜いたに違いなかった。

志麻さんが缺はさまで写真を切り抜き、それを人形ちよつぷに貼付している様を想像して、胃の底から苦いものが込み上げて来た。これは紛れもない狂気ではないか。

息子がねえ、かえって来たんですよ。

ちょうどいい按配ね。

お嫁さん。

(まさか。昨日の言葉は、そういう) 待て。待て。即断すべきじゃない。

相手は認知症のお年寄りだ。この行動に、深い意味なんてない。ただただ亡子を偲ぶ親心が、少しばかり風変わりな形で表出したに過ぎない。根本にあるのは狂気ではない。親心だ。相手がおかしいと決めつけるのは、介護従事者にあるまじきことだ。

私は必死にそう自戒した。

心臓が脈打つ音に紛れて、みしつと床が軋んだ。

弾かれたように振り返る。

暗い廊下に、志麻さんが立っていた。

私は呼吸すら忘れて固まった。

いや。なにも驚くことはないんだ。

私は咽喉につまっていた空気を吐き出した。

志麻さんは微動だにしない。敷居の向こうから、私を見つめたままだ。暗がりに翳かげつたその表情は不明瞭だ。しかし、なぜか喘わらっているような、そんな気がした。束の間の安堵は退潮して、再び不安の波が押し寄せて来た。

「あ、あの、志麻さん。勝手に上がっちゃってごめんなさい。ちょっとお話が」

「オカアサンだよ」

ぼそりと、しかしはっきりと志麻さんはささやいた。

「オカアサン」

ぞわつとした。

昨日の志麻さんとは様子が違った。これまで形を保っていた箍たがが外れたような――  
「認知症だからとか、そんな理屈では隠しようのない静かな狂乱が、志麻さんの外皮をまとっているように思えた。」

「ちょうどね、お呼びしようと思っていたのよ。支度が整ったから」

こちらにいらっしやい。

志麻さんのか細い声が私に届くと同時に。

志麻さんの影は暗がりに溶け込んでいった。

駄目だ。

行っってはいけない。

からだ

身体は必死に抗おうとしている。しかし、心は無抵抗だった。吸い寄せられるように、

私は志麻さんの後を追った。

子供部屋のドアは開け放たれていて、窺い知れぬ闇が口を開けているようだった。志麻さんに続いて、私もその聖域に足を踏み入れた。

部屋の空気は澱んでいた。

暗く、息苦しい。幾十年もの時間が堆積して、そのまま凝り固まってしまったのではないか。その重々しさに、肺が圧迫される心地がした。

「床を整えておいたから」

志麻さんが掌で示した先には、布団が敷かれてあった。あたかも結婚初夜のような。

ここから逃げるべきだ。

なのに、この状況に従おうとしている自分がいた。

志麻さんの言葉に誘われたように、へたっていた布団が徐々に盛り上がり始めた。

「なったあ、なったあ、蛇になったあ」

志麻さんが唄い出した。

布団の中で、何かが蠢いている。

「当家のムコドノお蛇じゃになったあ」

布団の隙間から、赤黒い腕のようなのが伸びてくる。蛇を思わせる動きで這い寄ったそれは、立ち竦む私の足を掴もうとした。

直後、正午の時報サイレンが鳴り響いた。

志麻さんの唄が掻き消される。

けたたま

消魂しい吹鳴が耳を劈いて――

私は現実に引き戻された。

裸足で外に飛び出した。

欠畑さんの家に駆けこんでチャイムを連打する。半狂乱となった私を見て、欠畑さんは驚愕したものの、異常事態が起きたことは察してくれた。

欠畑さんを伴って子供部屋に舞い戻ってみると、虚ろな目で微笑む志麻さんが坐しているばかりで、薄汚れた布団の中には何もいなかった。

数ヶ月後。

志麻さんの施設入所が決まった。あの古屋も取り壊されるそうだ。

「阿瀬川さん、休職されるんですか」

引継ぎを終えると、施設ケアマネの倅田こうだは案じ顔ただで質した。

「ええ、少し疲れてしまって。今後のことも考えようかなと」

復職するかどうかは決めていない。とにかく頭を空っぽにしたい気分だった。私は倅田の薬指に輝くリングをぼんやりと眺めた。

「いま、お幸せ？」

つい不躰ぶしつけな質問が口から零れてしまった。倅田は気に障った風もなく「まあまあですね」と応じた。

「それならきっと、大丈夫」

どんな幻想が相手でも。

私は倅田に頭を下げると、振り返らずにその場を後にした。